
TIME ~忘れられたものの話~

水花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TIME～忘れられたものの話～

【著者名】

NO156T

【作者名】

水花

【あらすじ】

田嶋しをされて連れて行かれた先は・・・

田隠しをされて乗り物に積まれて、「」といいと揺られて。

とても長い時間が過ぎたように思つ。

いきなり田隠しを外されても、飛び込んできた光があまりに眩しくて、すぐにきつく目を開じてしまった。

だから、どんなところに田分が居るかなんて、少しもわからぬ。音が違う、空気が違う・・・匂いが違う。

何もかも違う、知らない場所。

声だけが聞こえてきた。知らない誰かの声。

「どうでしょ。今はもづ、なかなか手に入るもんじゃありませんよ

「そうですねえ・・・」

片方の声は思案するように沈黙する。あまりに静かなのは苦手だ。かといって、うるさいのが好きなわけじゃ、ないけれど。

「うん、それじゃあ、もううつことにします」

「ありがとうございます！」

片方の声は、弾むように答えた。ちゃりん、と金属が落ちる音、そしてかさこそという紙が擦れる音が聞こえた。

ここは何処なんだろう？

心細さで胸が一杯になる。瞬きを繰り返してもまだ何も見えでこなくて、とても不安だった。

「それじゃ、また何かいい物があつたら連絡しますよ

扉の開く音と閉まる音、そしてちりりんと澄んだ鈴の音が聞こえて・・・そうして静かになつた。

その頃になつて、ようやく目が慣れてきた。

きょろきょろと辺りを見回すと、やはり全然知らない場所だった。少しのテーブルと椅子、そしてお茶の香りがする。

長いこといた、あのお気に入りの場所じゃ、なかつた。

泣きそうになつて呟いた。

「ここ、どこなの・・・」

みんなどこに行つたの。そばでお茶を飲んで、楽しそうに笑つて
いたひとたちは。

わたしはどこにいるの・・・一人きりで。

「おや、気がついたようですね」

やわらかな声がかけられ、飛び上がりそうなほど驚いた。自分の
声が聞こえるなんて、思わなかつたから。

少しためらつた後・・・うん、と小さく頷いてから、尋ねた。何
故自分が此処に居るかを。

この人なら、自分がここに居る理由を、知つていそつな気がした
から。

「わたし、なんでここに居るの・・・？」

柔らかな声の持ち主は、穏やかな秋の日差しのよつたな笑みを浮か
べて答えをくれた。

「きみのもと居た所ではね、今までの習慣を止めて、他の街と同
じような・・・を使うことになつたんです」

驚きに声も出なくなつた。そんな話ちつとも知らなかつた。じゃ
あ、自分は要らなくなつたの？

じわりと涙が浮かびそうになる。穏やかな空間の、一部であり続
けるんだけど・・・そう思つていたのに。

穏やかな声の主は、温かな指先で優しく頭を撫でてくれた。

「そして、きみの持ち主は街を越したと聞いています。でも、きみ
は捨てられたわけじゃないですよ。きっと、一緒にには連れてゆけな
い理由があつたんでしょう」

きみは大事にされてきたようですね。だいいち、傷一つありま
せんから。

声の主は、泣きそうな子供を安心させるよつたな声で言つ。

理由。すぐに思い当たるものはあつた。多分、自分のこの体が大き
いせいだ。だから一度決められた場所からは、動くことが出来な

かつた。

置いてゆかれた事は悲しくて、今でも一緒にきたかつたのことと思つてしまふが、同時に仕方ないことだと判つている。もう会えない人たち、一度と戻れない場所へ心の中ではよならを言った。

「長旅で疲れたでしょう。少しお休みなさい」

そういうわれると、確かに揺られ続けていて、体がとても重かつた。ここがどんな場所か・・・まだよくわからないけれど、この優しい声の主と居られるならきっと安心できる、そう思つて目を閉じた。いくらもしないうちに、眠りの波が襲つてきて・・・その波に体を委ねたのだ。

喫茶店の店主は、その様子をじっと見ていた。

時計の針が、次第に止まつてゆく有様を。

古い型の時計、日月の運行に合わせた時を刻む、特殊な型の時計。今は殆どの場所で使われなくなつた時計が、しづかに眠つていく様子を。

穏やかな目で見守つていた。

今はこの時計が使われていた街でも、世界共通の時を刻む時計が、時を告げていることだろう。

めぐる季節に関係なく、ただ機械的に割り振られた時を・・・淀むことなく正確に。

この時計は、その街では役目を終えたのだ。

いとおしむように、店主は時計を撫で、言つた。

とてもやせしい声で。

「おつかれさま、ゆっくりおやすみ」

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156t/>

TIME～忘れられたものの話～

2011年10月9日01時01分発行